

住生活様式と家族生活史

井上洋子

わが国旧石器時代の遺跡「岩宿」の最初の発見者である相沢忠洋氏は、その当時自転車で行商をしながら、遺跡や遺物をみつづけることを唯一の楽しみとする孤獨な一青年であった。かれが考古学への強い関心と情熱を抱くようになったのは、10代の初め頃父母が離婚し、弟妹たちは他家にやられて自分は寺に預けられるなど辛く寂しい境遇の中で、工事場で拾った土器片について「まだ電気もなかった時代のもので、その頃の人たちはいろいろの火を囲みながら、家じゅう集まって話し合って暮していた」という説明をきいたことが、失われた一家だんらんを過去の生活の場の中に追い求めてゆくきっかけとなった、と述べていられる。(相沢忠洋『岩宿』……の発見』・講談社)

「家族生活」の原点を思いめぐらすとき、私は相沢氏の描かれたイメージがいつもよみがえってくる。しかし、一つの火(後世にはそれは一つの食卓に変わったが)を囲んでの家族だんらんといい情景が、各時代において具体的にどのようなものであったか、となるると今ひとつはつきりしてこない。

私に関心を持っているのは住生活の面であるが、この分野でもまだまだ未解明の問題が多い。たとえばいろいろの周辺に家族が坐

る位置、ヨコザとかカカザと呼ばれているそれはいつ頃定着し始めたものだろうか。また農家住宅には必ず「ナンド」とか「チョウダイ」などと呼ぶ寝室があったものだが、ここは夫婦専用の寝室として確立していたのだろうか。ほかの家族には専用の寝室はなかったのか。

そして最近気になっているのが、寝殿造邸宅における家族生活についてである。周知のようにこの邸宅様式は、主屋である寝殿を中心として、対屋と呼ばれる副屋が数棟、東西及び北側に建てられ、それぞれの間を渡廊が連結しているという形式が原則とされていた。そして寝殿に主人(女主人である場合も少なかったようである)とその配偶者が住み、対屋には娘や息子、その他の家族が居住していたとされる。平安時代後期には邸宅の規模が縮小してゆき、別棟の対屋の代りに対代、対代廊などが設けられるようになるが、その一画を仕切って部屋とし、そこに娘や息子達を住まわせることになる。部屋住みの若い貴族が「御曹子」と呼ばれるようになる。

このように年ごろになった娘や息子を、独立した別の空間に住まわせる生活様式は、寝殿造の成立とともにあらわれたものなのか。あるいは妻問婚の伝統に基いて、親世代との就寝分離がすでに行われていたものなのか。このような邸宅における一家だんらんは、どこで行われていたのであろうか。等々。

いろいろの課題が解明を待っている。

(精華女子短期大学・住居史、女性史)